

# お互いに尊重しあい、ともに生きる社会をめざして

12月4日～10日は人権週間です。2か月にわたり人権特集を掲載します。人権について考えてみませんか。

第41回全国中学生人権作文コンテスト横浜市大会に、52,729作品の応募がありました。  
その中から、最優秀賞「横浜市長賞」を受賞した作品を紹介します。

## 最優秀賞「横浜市長賞」

### ぼくはスカートを履いている

横浜市立新羽中学校2年 増田 春之介さん

ぼくは制服のスカートを履いている。テストの時、合唱祭、高校見学でも、『ぼく』という一人称もしっかりこないで、早速だが『私』にする。

なぜスカートなのかというと、涼しいし、かわいいからだ。ズボンは悪くないが、あつい。涼しくてかわいいのならば履く。いつからスカートを履くようになったかというと、小学五年生の時だ。英語教室の発表会で女の子役をやった。性別の問題に訴える目的もあった。英語の先生は母だ。本番後に隣のコンビニにスカートで行ってみたいと思い、母に聞いてみたらすんなり「いいよ。」といわれた。実はやめなさいと言われると思っていたからビックリした。それからは安心して履きたいと言えるようになった。

私は、見た目は『格好いい』より『かわいい』と言われない。これまでジャージが楽だと思っていた。ある日母が女の子用のお店に連れて行ってから洋服を着るのが楽しくなった。姉もいつも「かわいい」とほめてくれる。昔から髪も伸ばしたかった。今は肩まであり、美容院では、女の子カットしてもらっている。美容師さんはすんなりうけ入れてくれる。普段からオシャレに関わる日常を過ごしているからかなと思う。

私には女の子のお友達も多い。男子からは変な意味にとられたこともあったけど、べつに気にしない。発達障害もあってオープンにしているし、昔からいろんな反応を受けてきた。いちいち気にしていたら生きていけない。ここまで読んでいただき、学校の校則はどうなってるのと思う人もいだろう。私が入学する前、姉の友人が生徒会で、制服を変える活動をしていた。その時女子がズボンを履いてもよくなった。先生がたが私のスカートを履きたいという要望をさらに話合ってください、ついに校則が変わった。『女子』『男子』の文字が削除。家族で感動した。母は泣いていた。携わってくれた先生は「いつか取り組まなければいけない問題なので、向き合えなければ。」と言ってくれた。また、そういう環境があたりまえだと思ってくれている先生もいる。そうだし、本当によかったと思う。みなさんにつたえたいのは、まわりの人にいう大切さだ。

私が、みんなにスカートや障害のことをいってよかったと思うのは、理解してくれる人がいることだ。しかも結構な人数。最近ではSDGsもあって、関わりを持とうとしている人も多くなり、言いやすくなっている。正直SDGsの中で障害をあつかうことは「遅くない？」と思ったが、障害というものを知らない人も多かったので、みんなで考えることができるのでよきかいた。小学校低学年の時、私も友達なんていらなかったと思っていましたが、今はたくさんの大切な友達、味方がいる。みんなには、本当の自分のことをいっていいと思ってほしいし、いわないのは嘘をついて生きていることになる。保護者や先生にも、私たちが言ってもいい人だと安心できる環境をつくってほしい。子どもに嘘をつかせないでほしい。その子自身は、言おうとしている。子どもでもヘルプの気持ちがある。ヘルプをオープンに。それをダメと言うことは、その子をいじめている。存在を否定している。

あるディズニー映画で「かくせ、感じるな、みんなに知らせるな。」と言う父親から娘にいきかせるシーンがあるがおかしい。誰が見ても、おかしいと思えるように書かれている。それと同じことはしないように、というメッセージだ。映画にかんどうするだけではなく、この世界にもむきあって私たちを守ってほしい。母曰く「ハルはハル、障害を持っていることを隠したら、自分は隠すような恥ずかしい人間なんだと思ってしまう。他人に対して、誰一人そんなことはしてはいけない。」今ではこれが私の考えにもなっている。

私は障害を持つ身としてみんなと同じように接してほしい、特別扱いされたくない。スカートも特別ではない目で見てほしい。私と同じ思いをして、勇気をだして自分のことを話した人のことをたくさんの人に理解してほしい。私が障害を持っていなければずっと障害を知らなかったかもしれない。ほかのことも知らなかったかもしれない。同じ思いをしている人の役に立ちたいと思えるようになった。私の人生全ては、神様がくれたプレゼントだと思う。

## 大切にしよう 人を思う心

横浜市内の専門学校生からデザインを募り、人権啓発ポスターを作成しました。

『大切にしよう 人を思う心』という標語には、誰もが自分らしく生きるために、互いを尊重して思いやる気持ちが大切であるという思いを込めています。「人それぞれの違いを認め、全ての人互いの人権を尊重しあうことが心豊かな社会につながる」ということを、ポスターを通じて伝えていきます。

これまでの人権啓発ポスターは市ウェブページでご覧いただけます。



令和4年度ポスターデザイン  
横浜デジタルアーツ専門学校  
佐々木ヒカルさん

横浜市 人権啓発ポスター 検索

【問合せ】市民局人権課 ☎671-2718 ☎681-5453

## HIV・エイズ～正しい知識と理解を～

HIV(ヒト免疫不全ウイルス)は、さまざまな病原体からヒトの体を守る免疫細胞に感染するウイルスです。HIVに感染することで免疫力が低下し、感染症などを発症した状態をエイズ(後天性免疫不全症候群)といいます。

HIVに感染してもすぐにエイズを発症するわけではありません。適切な治療によりHIVをコントロールすることで、感染前と同じように生活を送ることができます。エイズ発症前にHIV感染を発見できれば、ほぼ確実に発症を予防できるようになってきています。

感染症に関する誤った情報や思い込み、知識不足によって、感染者への偏見や差別が生じます。感染症は誰もがかかりうる病気です。私たち一人ひとりが正しい知識を持ち、理解を深めることが大切です。



レッドリボンとはHIV・エイズとともに生きる人々に偏見をもたず、差別しないというメッセージです。

【問合せ】健康福祉局健康安全課 ☎671-2729 ☎664-7296

## 自死遺族の心の支えに

身近な人や大切な人を自殺によって亡くした遺族は「殺」という文字に傷つくことがあります。

そのため、遺族は「自殺」ではなく「自死」という言葉を使い、自殺で身近な人を亡くされた方を「自死遺族」と呼んでいます。自死遺族は、悲しみや自責の念、社会の偏見などから自殺で亡くなったことや悲しみを誰にも話すことができず、地域や社会から孤立してしまうことがあります。

ゆっくり静かに話を聴くこと、「必要なときはそばにいるよ」というメッセージを伝えることが遺族の支えになります。

自殺の現状や自死遺族への理解を深めることで、遺族が安心して話せる場を作り、自殺に対する偏見や差別をなくしていくことが大切です。

参考文献:「自死・自殺」の表現に関するガイドライン(NPO法人全国自死遺族総合支援センター)

～自殺について知ってほしいこと～

横浜市自殺対策ホームページ

横浜市 生きる 検索



【問合せ】健康福祉局こころの健康相談センター  
☎662-3558 ☎662-3525

## コロナ禍での困りごと

～ほんの少しの気遣いを～

「複数人で話していると、マスクで口元が見えず、誰が話しているのかわかりません」

「口の動きや表情からも言葉を読み取るので、マスク生活になって会話が難しい」「筆談しようとペンやノートを差し出しても受け取ってくれません」

これらは聴覚障害のある人たちのコロナ禍での困りごとです。あなたならどうしますか?口元が透明フィルムになっているマスクを着用する、自分用の筆記用具を常備する…。

障害理解を進めるためには「対話」が必要と言われていますが、コロナ禍で「対話」が難しくなった人たちがいます。

一人ひとりの少しの気遣いで支え合える社会をつくっていきましょう。



横浜市 障害者差別解消 検索

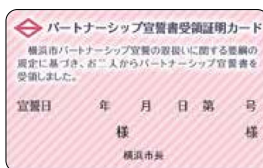
【問合せ】健康福祉局障害施策推進課  
☎671-3598 ☎671-3566

## 知っていますか? パートナーシップ宣誓制度

同性カップルの中には、「周囲の人に打ち明けられない」「パートナーに万が一のことがあっても家族として扱われない」などの悩みを抱えている人もいます。

横浜市では「横浜市パートナーシップ宣誓制度」を実施しています。制度の開始から3年が経ち、宣誓したカップルはまもなく300組を迎えます。

多様性を認め合い、誰もがいきいきと生活することができる社会のために、まずは多様な性のあり方について考えてみませんか。



横浜市 パートナーシップ宣誓制度 検索

【問合せ】市民局人権課 ☎671-2718 ☎681-5453

### ◆個別専門相談「よこはまLGBT相談」 要予約

月2回面接相談

【問合せ】予約専用番号 NPO法人SHIP

☎594-6160

(水・金・土曜16時～20時、日曜14時～18時)

### ◆交流スペース「Friend SHIPよこはま」 予約不要

月2回開催

【問合せ】NPO法人SHIP ☎577-2150

(水・金・土曜16時～20時、日曜14時～18時)

### ◆パートナーシップ宣誓制度 要予約

【問合せ】市民局人権課 ☎671-2718